

地域密着型自然学校「ノーム自然環境教育事務所」における新規事業の可能性

森と木のクリエイター科2年森林環境教育専攻 坂本 環

1. 研究背景と目的

私の両親は、福井県大野市で「ノーム自然環境教育事務所（以下、ノーム）」を経営し、幼児から大人までを対象に自然体験活動やセラピープログラムを提供し心と体の健康を応援してきた。両親が25年間続けてきた活動は、自分にとって幼少期からの遊び場であり、自然と人をつなぐ大切な存在だ。私は高校卒業後に自衛隊で事務官として働かなかで、日常的な自然体験が不足していく感覚を味わった。「幼い頃から自然体験をしていた自分でさえ、きっかけがなければ外に出なくなる」危うさを感じ、同時に両親の「自然と人をつなぐ」仕事の重要性に改めて気づいた。また、両親は共に60歳を過ぎ、活動規模が徐々に縮小している。このままでは、地域にとって貴重な自然体験の場が消えてしまう。そう思い、私はノームを継ぐために森林文化アカデミーに入学した。アカデミーで学びを進めていくうちに、卒業後両親の既存事業を引き継いでいながら、新たな事業も展開していきたいと思うようになった。そこで地域資源や自分の思いを大切にしたい新規事業を提案し、両親及び有識者から評価をもらい、その可能性を探ることを研究の目的とした。

2. 研究の流れ

1 基礎調査

1. **ノームの現状把握**： 両親へのヒアリングを通じたノームの現状把握（両親やノーム関係者へのヒアリング）、地域資源の把握。
2. **同規模事例調査**： またね自然学校、TEC当別エコロジカルセンターへのインターンシップ、ヒアリング。
3. **参考事例調査**： やまのはたへ
4. **行政へのヒアリング**： 福井県大野市・勝山市の行政担当者へのヒアリング。

2 新規事業の提案

3 両親、有識者によるフィードバック

4 まとめ

3. 調査結果と考察

3-1. ノームの現状（調査1-1）

両親へのヒアリングにより、ノームは行政関連の委託事業が売上の大部分を占めていることが分かった。行政事業は年度ごとの契約であり、社会情勢や予算に左右されるリスクが大きい。また、

活動場所の多くが借地であることから、拠点の存続自体が外部要因に依存している。そして多くの事業は大野市で展開しており、勝山市での活動が意外にも少ないことが分かった。

3-2. 同規模事例調査（調査1-2）

静岡県伊豆市の「またね自然学校」でのインターンシップ（計4週間）を行った。代表へのヒアリングでは、ファン層の形成や行政との良好な関係維持、さらには企業研修といった多角化の重要性を学び、自然学校運営の厳しさと可能性の両面を実感した。

3-3. 参考事例調査（調査1-3）

岐阜県美濃加茂市の「やまのはたへ」の酒向さんに行ったヒアリングでは、事業を提案するならば、飛び込みではなく日頃の繋がりを大切にすること。自然学校は移住や資源循環に貢献する地域の「ハブ」になる可能性がある。事前の算段をしたうえで完璧を求めすぎず挑戦する姿勢が必要だということを聴くことができた。

3-1 から 3-3 をとおして

また、当たり前かもしれないが事例調査をへて強く感じたのは、その人が心から楽しい、好きと思っている事業をしているということ。

3-4. 行政へのヒアリング（調査1-4）

大野市・勝山市へのヒアリングでは、自然体験の必要性は認識されているものの、既存プログラムのマンネリ化や参加者の固定化が共通の課題であった。しかし具体的な解決策を見出せていない状況にあることが分かった。

4. 事業の提案：縄文

調査結果をふまえ、自分独自の自主事業を「縄文」をテーマに考えてみた。

4-1. なぜ「縄文」なのか

福井県といえば恐竜だ。しかし恐竜だけではなく、縄文遺跡も発掘されている。そしてこの縄文というコンテンツが地域の中で活用があまり進んでいない状況であった。また、アカデミーでのキャンプや現場実習を通して、子どもたちが没頭するのは、穴を掘る、魚を釣る、木の実を探す、小道具を自作するといった「狩猟採集」のような原始的な活動だと感じた。しかし、現代の便利で無駄のない空間は失敗や危険を取り除きがちになり創意工夫の機会を少なくしていると思う。一方で、縄文時代は創意工夫の連続で生き抜いた時代だと思った。工夫しないと生きていけない、この

「不足」が子どもたちの主体性を引き出すことに繋がるはずだ。さらに縄文時代の「平和」「持続可能な社会」「対価のない繋がり」「人と人のつながり」という要素はこれからのウェルビーイングな生活、社会の鍵となっていくと思った。

4-2. 福井ジョーモンランド (FJL) の提案

縄文プログラムの拠点として福井ジョーモンランド (以下 FJL) を提案する。FJL は東京ディズニーランドのような消費型テーマパークではなく地域や森を舞台にした創造型のエコミュージアムだ。また既存の縄文施設での体験は、縄文人の暮らしの知識を与えるベースの体験学習や見学に留まるものになりがちだ。そうではなく、正解が分からない縄文時代を想像しながら暮らしを体験できるような場所にしたい。

4-2. 縄文キャンプのねらい

その中で今回私が提案する縄文キャンプは、「変化し、思い通りにならない自然 (他人) との折り合い」をテーマにした生活体験だ。現代の便利な生活を一度手放し、自作の道具で「不便な生活」を仲間と協力して過ごしきることで人とのつながりや、自分を信じる力、失敗や不自由を「面白い」と捉える豊かな心を育む。昔の縄文人たちが身の回りの環境を利用して暮らしていたように、少し不便な環境に身を置くことで、自己肯定感や仲間を思いやる心を育むことを狙いとしている。

4-3. プログラムの構成

【春秋】道具制作 (1泊2日)

1日目に粘土を掘り出し、精製する。

2日目に土器を制作する。

【夏冬】縄文キャンプ (3泊4日)

1日目	2日目	3日目	4日目
オリエンテーション	朝散歩	朝散歩	朝散歩
焼成	朝ごはんづくり	朝ごはんづくり	朝ごはんづくり
何するか会議	何するか会議	何するか会議	片付け
お昼ご飯	フリータイム	フリータイム	振り返り
フリータイム	夕ご飯づくり	夕ご飯づくり	お昼ご飯
夕ご飯づくり	おやすみなさい	おやすみなさい	またねの会
おやすみなさい			



・土器焼成：初日に土器を焼き、完成した土器で料理を作りご飯を食べる。割れた場合はその欠片をどう活かすか話し合う。自分で作った道具を使うことは、道具に対する愛着に繋がり子供たちの主体性を引き出すきっかけになると思う。

・朝会議：やりたいこと、生活するうえで必要な

ことみんなで話し合っ一日どのように過ごすかを決める。

・表現する：一日の終わりにその日に感じたことを各々が表現する。絵でも音楽でも言葉でもいいので表現する。

5. 有識者からのフィードバック

「縄文というキーワードは現代社会において人々に興味を持ってもらやすい」

「縄文を単体で扱うところにもある体験になる、地域の文化や歴史の中に縄文を組み込むことでオリジナリティが出る」

「何を伝えたくて活動しているのかその軸が大切で、達成する手段として縄文があればいいと思う」

「縄文1つで色んな事業に取り組みると思う。」

「狂ったくらい縄文を好きになれば、人は集まると思う。」

縄文というキーワードが新規事業として可能性があるかもしれないということが分かった。ただ、活動の目的や軸がないとただの体験になってしまうという意見をもらった。

6. 考察と今後の展開

フィードバックから今後の自分の活動の目的や軸を2年間のアカデミー生活からまとめてみた。

- ・すべての人と自然をつなげる
- ・思考力、表現力、行動力、を育む
- ・来てくれた人の可能性を引き出す
- ・人と人のつながりを取り戻す
- ・本気でバカをして楽しむ

また縄文キャンプを考えている過程で一つの矛盾に直面した。「地域密着」のノームでありながら、高額な宿泊キャンプは、地元の子どもの場にはなりにくい。そうなると地域密着型自然学校のノームとしての役割を果たせていないのではないかと思った。そんな時、ドイツ研修で訪れた中世の世界観を再現している地域の人々の居場所「Geschichtserlebnisraum Roter Hahn e. V.」を思い出した。

- ・動物と共に過ごす
- ・責任をとらぬ自由な遊び場
- ・本物の体験
- ・壁のないコミュニティ

この施設では子供たちが家畜や畑、伝統的な技術、自由な遊びを体験できるようになっている。小学生から大学生まで利用し、日中は学校団体が利用し、放課後は子どもたちが自由に家畜の世話や遊び、暮らしの技術を体験できる。運営費は行政予算や寄付金、イベントなどで賄われている。この縄文版として「縄文ランド」をつくることで、地域の子どもたちにもアプローチできると考える。今回研究のなかで実践することができなかったが縄文というキーワードを得ることができた。まずは小規模なスタートを切るが、縄文キャンプを新たな事業とし、福井の豊かな自然と人、そして太古からの創造力を結びつける場を創出していけるように、今からでもできることをやっていきたい。